

## プロクロスにおけるオケーマをめぐる

土井裕人

五世紀の新プラトン主義者プロクロスらにおけるオケーマ(乗り物)を取り上げるとは、人間の魂と神たる宇宙との関わりという宗教学的テーマの検討において大きな意味を持つであろう。このオケーマそのものはプラトンにおける重要概念とは必ずしも言えないが、新プラトン主義者たちの解釈に素地を与えている。たとえば、『パイドン』終盤のミュートスでは、善くも悪くもない生にあった死者が冥界のアケロン河で乗せられる舟として、『パイドロス』中盤のミュートスではいわゆるイデア観照で登場する二頭立ての馬車としてオケーマが登場する。なかでも、プロクロスがオケーマを大きく取り上げて註解する箇所の一つは、『テイマイオス』において制作者(デーミウールゴス)が人間として出生する魂たちに宇宙の本来のあり方を見せるために乗せた馬車のくだりである。

プロクロスは主に『テイマイオス註解』や『神学綱要』においてオケーマを論じており、不死的なものと可死的なもの、非身体と身体との狭間に位置する媒介者と位置づけている。具体的には、制作者の手がけた不死なる星の乗り物としてのオケーマや、身体の死を生き延びるが不滅ではなく、個別的魂の降下に際して子の神々が前者に織り込んだ気息的乗り物としてのオケーマが提示されている。こうしてオケーマが登場する理由は、類似しない不連続なものは相互に影響を及ぼすことができ

ず、上位者は何らかの類似した中間者によって下位の物体ないし身体まで結ばれる必要があるためであり、存在身分を異にした魂と身体との間において、両者の性質をともに備えた媒介者が、魂を直接的に分有する「第一義的な物体」として要請されることになる。これは、制作者に手がけられたことで、魂がこの世界に上昇・下降するサイクルにあっても実体を保って分割されない「魂の乗り物」となる。この乗り物は、個別的な魂(その全体が感覚的世界への降下と上昇を周期的に繰り返す)を乗せて上下動することになるが、ここで注目されるのは動とその模倣という論点である。すなわち、宇宙における星のオケーマの動を模倣することで人間の側の動は秩序正しく立て直され、魂も神の側へ上昇するということになるが、これはまさにプラトン『テイマイオス』において主張されていた、宇宙の魂の円環動を模倣することで人間の魂を混乱から本来のあり方に回復させる「神に似ること」を踏まえていると言えよう。じつさい、プロクロスも当該箇所を引用し、常に幸福な宇宙万有に似ること、人間自身もその原因の側へと導き上げられ幸福な者になるとする。

したがって、プロクロスの場合は存在の階層だけでなく動においてもオケーマが「神に似ること」の媒介者となっており、これはプラトンにおいてははつきりしていなかった内容を新プラトン主義的な論点を伴って再解釈したと言える。しかし、プロクロスにおいて特徴的なのは、魂の上昇に際して気息的乗り物を含めた後天的な付与物の除去が主張されるなかで、密儀や神働術(テウールギアー)が愛智・哲学に勝る寄与をなすとさ

れていることである。ここには、カルデア神託を重視した新プラトン主義者のイアンブリコスを中心とする流れが見られ、彼は上昇のための浄化をもたらす神からの光を受容するものとオケイマを捉えるなど、儀礼的実践の重要な対象と見なしている。

こうした様相は、プラトニズムに実践を伴った宗教思想としての特徴を与えているとともに、ギリシア哲学の伝統と儀礼的実践との合流という、哲学と宗教が交錯した、あるいは不可分に一つとなったあり方を見せていると考えられる。

### アウグステイヌス『告白』における

#### 新プラトン主義の位置づけ

山田 庄太郎

本発表では、構造的観点から『告白』における新プラトン主義についての語りを分析することを通し、同書の中で新プラトン主義がどのように位置づけられ、かつまた、いかなる機能を有しているかを明らかにすることを試みた。

我々はまず『告白』における新プラトン主義への言及について検討を加えた。これらの言及は全て「プラトン派の書物」という語句を以って為されており、その語りの時制は同書七巻で語られる三一歳当時のアウグステイヌスを指し示していることが確認された。

次に、加藤信朗『アウグステイヌス『告白録』講義』（知泉

書館、二〇〇六年、八九―九〇頁）ならびに宮本久雄「アウグステイヌス文学のヘブライ的地平——『告白録』第一―第九巻における「キアスムス（交差対応的配列法）」構造」（『パトリステイカ』一三号、二〇〇九年、一四二―一八頁）の指摘を基に、『告白』の構造的解釈の一つとして、同書一一九巻のキアスムス構造に着目した。このキアスムス構造によって、第七巻で語られる「プラトン派の書物」が、第三巻で語られる『ホルテンシウス』のカウンターパートとして『告白』の内に配されていることが明らかとなった。

キケロの著作『ホルテンシウス』は、青年期のアウグステイヌスに対し、知恵への愛を燃え立たせると共に、聖書の単純な文体への失望をもたらし、「理性的な」宗教としてマニ教への入信に至らしめたことが『告白』の記述から知られる。他方、「プラトン派の書物」は、それによって引き起こされたミラノの上昇体験の結果としてマニ教からの訣別をもたらし、再び聖書を手取る為の契機として位置づけられる。従ってこの二つの書物は、共に聖書との関連で語られながらも、正反対の帰結を導くものとして『告白』の中で対称的に描かれている。

『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」は、それぞれ、アカデミア派とストア派とを折衷した哲学者キケロと、プラトン派とに帰される。アウグステイヌスは回心直後の著作『アカデミア派駁論』の中で、霊的で確実なものを教えるプラトン哲学——あるいはその純粋な復興体としての新プラトン主義——を、懐疑主義を特徴とするアカデミア派ならびに物質主義的なストア派の双方と対立させていた。それによれば、アカデミア